

## 58 『古今方彙』各種版本の検討

鈴木達彦<sup>1)</sup>・遠藤次郎<sup>2)</sup>・中村輝子<sup>2)</sup><sup>1)</sup>北里研究所東洋医学総合研究所<sup>2)</sup>東京理科大学薬学部

『古今方彙』は江戸時代以来今日に至るまで著名な処方集である。しかし本書には、版種が多く存在し、様々な問題を含んでいる。

まず、甲賀通元による『古今方彙』は、『刪補古今方彙』（享保十八年）と『重訂古今方彙』（延享四年）の二つがある。両書の序文について検討した結果、甲賀通元は書肆梅村からの依頼により、すでに存在した処方集を考訂し、『刪補古今方彙』を編纂したことが明らかとなる。すなわち、甲賀通元は『古今方彙』の編纂者であり、編纂の際に底本とした原『古今方彙』の存在が示唆された。

江戸時代の書籍目録から、元禄五年、九年、宝永六年のものに、「梅村古今方彙」、「梅村古今方彙増補」が

確認できた。これらは甲賀通元が編纂する以前の原『古今方彙』であり、さらに通元以前にも、『古今方彙』は増補改訂がされている。甲賀通元編『古今方彙』については、梅村弥右衛門を版元とする「刪補古今方彙」が確認できた。梅村弥右衛門は、京都の書肆であることが知られていて、通元の序文に記された梅村と、書籍目録の原『古今方彙』に附された梅村は、この梅村弥右衛門と推測される。

『重訂古今方彙』は延享四年、安永九年、文化五年、文久二年に刊行されているが、文化五年の書籍目録に『古今方彙』を確認できた。しかし、ここでの版元は、梅村ではなく勝村治右衛門となっている。甲賀通元編『古今方彙』は、途中で梅村から勝村に版元が移されたと考えられる。

以上の書籍目録における検討をふまえ、今日残された『古今方彙』の各種版本について検討を行った。まず東京大学総合図書館（Ⅶ―12067）の『古今方彙』について検討する。本資料は、今回調査した『古今方彙』のうち、収載処方数は最も少ない一二五九処方

あった。そのうちの半分以上は『万病回春』などの龔廷賢の医書からの引用である。本書を原『古今方彙』である梅村『古今方彙』と推定した。

次に中之島図書館石崎文庫（六九二—一三八）の『古今方彙』は、原『古今方彙』の内容をほぼ含んでいて、二七六処方が増補されている。増補された七割以上の二〇三例が『医学入門』からの引用である。本書を原『古今方彙』に増補を加えた増補梅村『古今方彙』と推定した。

甲賀通元編『刪補古今方彙』は通元による増補部分に丸印をつけて区別しているが、これを除くと増補梅村『古今方彙』に近似している。したがって、甲賀通元が底本としたのは、増補梅村『古今方彙』であることが推測された。甲賀通元の増補処方は四〇〇弱に及ぶが、その引用で一番多いのは薛立齋の医書からである。原『古今方彙』で中心であった龔廷賢の医書からの引用はごくわずかであることが確認できた。

『古今方彙』と並ぶ江戸時代の著名な処方集に『衆方規矩』がある。『衆方規矩』も龔廷賢の医書を中心とし

た処方集である。しかし両書の異なる点は、『衆方規矩』が基本処方と加減方というスタイルをとっているのに対し、『古今方彙』は処方数がずっと多く、重要処方を列記していることである。『刪補古今方彙』の望月三英の序文に「天下莫不皆云吾藥籠中物」とあるように、薬箱に入れて携行し、臨床の場で使いやすいようにコンパクトな体裁であるのが『古今方彙』の特徴といえる。

さらに時代背景と比べてみると、岡本玄治の時代は『万病回春』を中心に、新方を取り入れている。少し時代が下ると、一部の後世派が薛立齋の医案について論じるようになる。

『古今方彙』は梅村『古今方彙』では新方を中心とした処方集として成立し、甲賀通元により薛立齋の処方を多く取り入れるようになった。これは『古今方彙』が、時代時代で重要処方を採用してきたことを示している。